



どこか惹かれる森戸川の佇まい ① 東京の女子学生調査レポート



東京にある目黒屋美学園中学高等学校・生物部の生徒たちは2年前から夏休みになると葉山で合宿を行う。森戸川の生物の種類や生息数を調査してまとめたものを文化祭で発表するためだ。調査はペットボトルで罌を作り川に沈めてみたり、自作の網を使ったりする。この川を選んだ理由は、上流から下流まで歩ける距離であること、川が綺麗で東京ではなかなか見ることのできない生物がたくさんいて調査のしがいがあるため。

森戸川は二子山東側の森を水源とし、葉山町桜山大山の山合いにそって流れ（上流域）、町北部の長柄（中流域）から堀内の市街地（下流域）を経て、森戸海岸（汽水域）へとつづく6kmほどの河川である。

上流域を歩いてみよう。大山の集落を川沿いに少し登ると車止めのゲートがあり、そこから先は林道となる。川のせせらぎに耳を澄ませながら歩くとカワセミ・キセキレイなどの鳴き声が聞こえ、オオルリ・サンコウチョウなどの珍しい野鳥たちに出会うこともある。水中にはオイカワ・スジエビなどの水中生物、トンボなど水辺の昆虫、ウサギやモグラなどの小動物も姿を見せる。6月にはホタルも見ることが出来る。上流域は生きも



森戸川上流域の空気は美味しい！



の豊かさを身近に感じさせてくれる場所であり、ハイカーやバードウォッチャーにとっても、その生命を存分に感じながら散策を楽しむ穴場ともいえるだろう。

女子学生たちは葉山町を都会と比べ静かで落ち着きがある町であり、森戸川は安全かつ清潔である印象を受けたそうだ。そして森戸川の魅力は、住宅街に面している川でその周囲は開発も進んでいないなか、川にゴミが少なく自然が保存されていることであると言う。なぜ、川にゴミが少なく自然が保存されているのか、森戸川が魅力的な存在であるのにはその美しさを守ろうとしている人々がいることを知る。

今回は中流から下流にかけて、生息する生物を追いながら、さらなる森戸川の魅力を探ってみる。

名店が始める新しい事はユニークだ。

「菊水亭」は葉山に住む誰もが知る名店レストラン。創業は一九一〇年で「いつの時代もどの世代の方々にも居心地の良い空間づくり」をモットーに伝統を守り、また新しいものを取り入れ営業してきた。その菊水亭が始めた新しいことが「菊水楽座」。毎月第三水曜日に開催している月1回のバザール。手づくり雑貨の販売（アートフラワー・ニット作品・レザー小物など）から、オリジナルギフトを作るワークショップなど、多様な商品が並んでいる。もちろん菊水亭の喫茶メニューをいただきながら、バザールを楽しむこともできる。



「菊水楽座」を始めたきっかけはオーナーの高木さんが「平日の葉山で何かイベントを」と発想したこと。町民だけでなく町外からの観光客もターゲットにし、フェイスブックなどで積極的に情報を公開している。客足も上々で、趣ある店内で会話やお茶を楽しみながら心地よい時間を過ごしている。

菊水亭



オーナーの高木さん

葉山町堀内 993 の3
046-875-0046

葉山自転車市場



オーナーの門脇さん

葉山町堀内 389
090-6516-1882
5月よりレンタサイクル
やっています！

名店・新店物語

二〇一三年三月にオープンした「葉山自転車市場」はヨーロッパのビンテージ自転車を商品としている。ヨーロッパ各国から集められた自転車は、店内に常時三〇台ほど並べられている。金額は八万〜百二十万円とさまざま。どこか懐かしさを感じるような、でもそれだけ時間を経ているように見えないとてもきれいでおしゃれな自転車である。ビンテージの自転車を扱うお店はなかなかないそう。希少な自転車を求めて遠方より自転車好きが集まる。自転車は百年前から部品が変わらずメンテナンス・修理に必要な部品には困らない。



だからこそ、いつまでも乗り続けることができる。オーナーの門脇さんは葉山出身。ご実家は元町で花屋を経営しているという生粋の葉山っ子。自転車好きが高じてそのままたまお店を開くことになったとのことだ。



「パークド葉山四季」自治会のユニークな試み

高齢者に新しい交流の場を提供



一色の小高い丘にある住宅地パークド葉山四季の自治会にはちよつと素敵な交流の場「サロン四季」がある。何が素敵かと聞かれたら「全部」と答えたい。仲間づくりの場としての存在、内容、またそれを企画・運営する人たちの取り組みと心根など。

「サロン四季」の代表野村さんは二〇一二年に当番制の理事会役員を引き受けることになったのだが、これがサロンの始まり。

初めて出席した理事会で民生委員から、地域でかわり合う場がないことを不満に感じている住民がいるので「サロンが作れないだろうか」と話が持ち込まれた。自治会でもかねてから高齢者の閉じこもりや孤立化が心配されており、ま

たかつては自治会でも親睦会が行われていた時期があったので、それならば「外に出るきっかけ」を作って地域の人間関係をつなぐと「サロン四季」を立ち上げることにした。立ち上げに際して野村さんは社会福祉協議会との話し合いや事務作業を担い、サロン作りの骨組みを整えた。

サロンは現在野村さんと民生委員を含めた6人がボランティアで企画・運営している。内容は、30分間の体操のあと講座を受講、そして昼食。講座はさまざまなジャンルで音楽、手工芸、体操など毎回異なる。

サロンを立ち上げる際に野村さんたちが大事にしたのは、できるだけ多くの人が参加してもらうために、参加する人が

負担を感じない、そして無理強いをしない誘い方で呼びかけること。講座のテーマを幅広い分野で企画するのもそのためで、前回の講座は興味がなかったけれどこれなら参加してみようかな、とその都度機会を得られるように配慮している。

「いろいろな講座を用意することで参加する人が、新しいことに触れ苦手意識を払しょくしたり、そこから会話や気づき、話題が広がるのが刺激になって、孤立してはいないと思える楽しみや人に会う楽しみ、身ぎれいにして出かける楽しみを感じてもらいたい」と野村さんは話す。

また、昼食もお弁当を注文して用意するが必ずしもみんなと一緒に食べなくてもいい。サロンには参加するけれどお昼は自宅で待つ家族と一緒に食べたいという人には、家族の分も注文し持ち帰ることもできるようにしている。



色とりどりの紙を重ねて作る
トランスパレントスターの会



皆と一緒に身体を動かそう！
ラフターヨガ（笑いヨガ）の会



ご近所で聴ける
フルーツコンサート



住民の中には芸術文化や趣味に技やセンスをもった人が多く、サロンではそのような人たちに講師や演奏披露などを頼んできた。こういったことも地域住民同士の出会いとなり新しい人間関係を作ることにつながる。

孤立しがちな高齢者がみずから外へ出て人間関係を作っていくこと、人と出会う楽しみを感じてくれることを願い、そのきっかけづくりのためにサロンの運営を先導してきた野村さんは今年度いっぱい代表を退くという。「ゆくゆくはこのサロンをきっかけに、高齢者が自分たちで企画して作っていく新しいサークルができたらいいなと思っている」。

そう夢を語る野村さんに、家事や育児に多忙な中で苦勞もあるのではと尋ねるとこう答えてくれた。

「大変なこともあるけれど、楽しい！サロンの運営に携わることで地域のことを知り、またたくさんの人と知り合うことができた。人と出会えること、それがボランティアの報酬だと思っています」

野村さんのやわらかな笑顔と心に響く言葉に、取材に伺った日は強い雨が降る日だったが雨のしずくの一粒子一粒子さえもキラキラと輝いていた。（取材・増岡貴子）